平成３０年度
座間市福祉推進作文・標語
入選作品集

第４５回座間市福祉大会

目　次

【小学校１・２年生の部　最優秀賞】
立野台小学校２年　池田　麻莉佳　「車いすの人をしあわせに」……1

【小学校３・４年生の部　最優秀賞】
栗原小学校４年　金谷　真結　「おばあさんのたん生日」……2

【小学校５・６年生の部　最優秀賞】
中原小学校６年　成田　はるか　「小さな手助け」……5

【中学校の部　最優秀賞】
座間中学校３年　西田　美結　「子ども食堂の存在を知って」……7

【小学校１・２年生の部　優秀賞】
ひばりが丘小学校２年　伊藤　拓海　「ふじゆうな人をたすけよう」……9
中原小学校２年　和田　花凛　「みんながしあわせにくらすために」……10

【小学校３・４年生の部　優秀賞】
立野台小学校３年　遠入　千尋　「しょうがいしゃのための物」……11
立野台小学校４年　越川　琴葉　「みんなを笑顔にする力」……12

【小学校５・６年生の部　優秀賞】
相模野小学校６年　塩澤　結花　「最初の幸せになる声かけ」……14
立野台小学校６年　鈴木　琴乃　「一人一人の心の中に」……16

【中学校の部　優秀賞】
栗原中学校２年　山口　花南　「勇気をもって」……18
相模中学校３年　佐藤　恵真　「普通と向き合うこと」……20

【小学校１・２年生の部　佳作】
ひばりが丘小学校２年　江川　紗彩　「おじいさんやさしいね」……22
立野台小学校２年　柳澤　優里　「ささえあう」……23

【小学校３・４年生の部　佳作】
東原小学校３年　河村　結音　「わたしのおばあちゃん」……24
入谷小学校３年　前川　璃緒　「車いすの大へんさ」……26
相武台東小学校４年　竹田　亜優　「困っている人へのいたわりの心」28

東原小学校４年　宮松　芽唯　「気持ちを考えることは大切」……30

【小学校５・６年生の部　佳作】
座間小学校５年　村田　葵　「バスの中で」……32
栗原小学校６年　山﨑　香菜絵　「ねぎ落としましたよ」……33
相模が丘小学校６年　松田　朋樹　「ぼくに出来ること」……35
中原小学校６年　大矢　珠璃　「不自由な人達のためにも」……37

【中学校の部　佳作】
東中学校１年　山﨑　結芽　「ちょっとした気づかい」……40
栗原中学校２年　勝又　心結　「みんなが暮らしやすい社会のために」42
南中学校２年　中村　結菜　「たくさんの人が幸せでいられるように」44
南中学校２年　安松　翼　「ささいな事で」……47

【標語の部　最優秀賞】
東中学校１年　小山　陽香……50

【標語の部　優秀賞】
相模が丘小学校５年　加藤　愛結……50
新田宿在住　岩堀　多起子……50

【標語の部　佳作】
ひばりが丘小学校６年　松岡　大和……50
東中学校１年　太田　爽日……50
東中学校１年　齊藤　風音……50
入谷在住　佐藤　玲子……50

※　本文中の表記については、原文を尊重しています。

【小学校１・２年生の部　最優秀賞】

車いすの人をしあわせに

立野台小学校２年　池田　麻莉佳

車いすは、がん、こうつうじこにあってしまった人や、のうこうそくをおこして、あるけなくなってしまった人がのる車です。

このまえ学校で見た、ビデオを見ていると、車いすにのっている本人が

「車いすにのっているからかわいそうといわれるのがくつうでした。」

といっていました。でもだからといって、

「あたりまえじゃん」

とか

「気をつけな」

とかいっていいわけではありません。だから大人になったら、ほどうにある『だんさ』をなくすしごとをしたいとおもいます。その車いすのかたは、なん年もまえにこうじをするしごとをしていました。そのとき上からすごくおもい石がおちてきて、したじきになってしまったそうです。車いすの人でもできるかんたんで楽しいしごとや、車いすの人でもできるおてつだいをふやすしごとがふえればいいなぁとおもっています。

もし、車いすの人がいたらみんなもてつだってあげてください。でも車いすの人を見かけたら、からかったりぜったいしないであげてください。

【小学校３・４年生の部　最優秀賞】

おばあさんのたん生日

栗原小学校４年　金谷　真結

わたしは、にんちしょうの人がいたら、いっぱいお話をしようと思いました。なぜかというと、こんなことがあったからです。

わたしは、ある日おじいさんおばあさんがたくさん集まるホームに行きました。

その日は、あるおばあさんのたん生日で、いっぱいの人がきていて、すごくきんちょうしました。

そして、あるおばあさんに、

「あんた何才。」

と聞かれてびっくりしました。

そして、わたしは、

「９才です。」

とおもいきって言いました。そしたら、おばあさんが、よろこんでわらってくれました。

わたしは、その時、すごくうれしかったです。

そしたら、またおばあさんから、

「あんた何才。」

と聞かれて、また、びっくりしました。

そして、わたしは、ちょっとじしんをもって、

「9 才です。」

と言いました。

そしたら、おばあさんが、またわらってくれました。そして、わたしは、もっともっとそのおばあさんと話したくなりました。

　そして、わたしはつくえの上にケーキがあったので、そのおばあさんに、
「そのケーキおいしいですね。」
と言いました。
　そしたら、そのおばあさんが、
「とってもおいしいです。」
とわたしに言ってくれました。
　わたしは、その時、おばあさんといっしょに話せてよかったなと思ってほっとしました。
　そして、わたしは、おばあさんと、二人でケーキを食べていると、お父さんが来て、
「となりのおばあさんとも話してあげてね。」
と言われて、わたしは、いっしょに三人でお話をして、その二人目のおばあさんは、
「小学生、中学生。」
と言われて、
「小学生です。」
とわたしは言いました。
　そしたら、おばあさんが、
「学校楽しい。」
と聞いてきて、
「はい、たのしいです。」
と言いました。
　そして、そのたん生日会がおわりました。
　にんちしょうについては、お父さんから、すぐにわすれてしまうびょう気だと聞きました。
　わたしは、そのおばあさんと話していて、えがおで聞いてくれてうれしい気持ちになります。おばあさんもうれし

い気持ちになっていると思うので、話ができてよかったなと思いました。

　お話をすると、にんちしょうの人もふつうの人とかんけいなくはなせるから大切にしたいです。これからも、おじいさんおばあさんとおもしろいお話をしていきたいです。

【小学校５・６年生の部　最優秀賞】

小さな手助け

中原小学校６年　成田　はるか

「大丈夫ですか？」
「ありがとうございます。」
私が病院の帰りに、薬をもらうため、薬局で順番をまっていたとき。一人の薬剤師さんがおじいさんの手をとりそう言った。おじいさんは、薬剤師さんをたよりに、私のとなりに座った。そして、手当たり次第、何かポケットをゴソゴソ。薬剤師さんは、またすぐに仕事にもどった。

おじいさんは目が見えていない、そう思った。おじいさんが薬局に入る前、薬剤師さんは仕事に集中していたけれど、いきなり、ドアの外を心配そうに見て、動きだした。ドアの外へ向かい、かえってきたと思ったら、誰かの手をとって話しかけている。私は、ドアからいちばん近い席に座っていたけれど、きっとそのおじいさんは、今、私が座っている席に座った方が楽だろうと思い、一つとなりの席へと移動した。すると、それに気づいた薬剤師さんが、
「ありがとう。」
とてもすてきな笑顔で言ってくれて、私も心がほっこりした。でも、自分のことでもないのにお礼が言えること。それがとてもすごいことだなあと感じた。

私は、その薬剤師さんがいつも仕事に集中されているのに、なにかと気配りのできるその姿をかっこいいなあと思った。また、福祉とは、人々が幸せに暮らすことで、もちろん私たちにも関係しているものだと思うけれど、障がい者、高れい者、これがいちばんすぐにおもいつく人だと思

う。私も、やってしまっているかもしれないけれど、障がい者を「あれが不自由だから」と特別あつかいするのではなく、みんな同じ目でみられたらと思った。一つだけ、他の人とちがうものをもっているだけで、外に出あるくとじろじろみられる。それがへんな意味でなくても、私だったらいやだと思う。だから、薬剤師さんの「こまっているときだけ手助けし、なにもなければそっとする。そして、自分のやるべきことをこなす」が気づかい、思いやりだと思い、お手本にしたいと思った。そして、薬剤師さんの「ありがとう」で心がほっこり、いい気分になったこと。すべて福祉につながっていくのだと思い、見知らぬ人に優しくということはできないけれど、身近な人、家族、友だち、近所の人には、優しく接してもらっているので、親切や思いやりをわすれず、大きな福祉でなくても、自分なりの小さな福祉をしっかり、やっていきたいと思った。

【中学校の部　最優秀賞】

子ども食堂の存在を知って

座間中学校３年　西田　美結

最近、よく「子ども食堂」という言葉を耳にする。子ども食堂とは、地域に住んでいる子ども達のための場で、地域の大人たちが一緒に食事を作って食べたりするという。全国には五〇〇以上の子ども食堂があり、座間市にも一軒あるそうだ。

子ども食堂が増えていった背景には、このようなデータがあった。日本の児童の六人に一人は貧困状態である、という国民生活基礎調査の結果だ。私はこの事実にとてもショックを受けた。貧困状態の家庭では親が夜遅くまで仕事をし、子ども達だけが家に残され、満足な食事も家族の団らんも出来ないという事がよくある事だという。私が毎日、家族六人で食卓を囲む夕食の時も、親の仕事の関係で一人、もしくは兄弟だけで食べているかもしれないのだ。私が食事の時、何よりも楽しいのは、家族に今日、学校であった話をしておいしいものを一緒に食べるからだ。それを一人だけで毎日食事をするのは、私だったら寂しいと思ってしまう。実際に子ども食堂を立ち上げた人の中には、自分自身が子どもの頃、貧困家庭の環境で育ち、自分と同じような環境にいる子ども達の寂しさや悲しさを少しでも救うことができたらという思いで活動している人もいる。このように子ども食堂は経済状態の厳しい環境に置かれている子ども達を救う活動として行われているが、最近はそれにプラスして子育て支援、学習支援としての役割も担っているようだ。今、日本では核家族化が進み、近所とのつながり

は挨拶くらいであまり強くないと思う。そのために私は子ども食堂の子育て支援という面に着目した。近所とのつながりが希薄な中で、子育てに悩みがあるのに周囲に相談できない母親や父親は少なくないと思う。そこで、その地域の同年齢の親たちと交流できる場としても子ども食堂はいいと思う。また核家族という事で普段、接することが少ない世代の方々と一緒に食事などを通じて交流できるのは、とても子ども達の成長にも良いと思う。

立ち上げた方は、元民生委員であったり、地域の母親たち、管理栄養士などと様々である。しかし、子ども達を笑顔にしたい、子ども達の居場所をつくりたい、大切な成長期に必要な栄養をとらせたい、と願いを共通してもっている。そういった地域の人たちの思いが子ども食堂を通じて実現されているのではないかと今回感じた。私は、この子ども食堂という活動が日本で、座間で、もっと広がったらいいと思う。だが、市民の力だけでは、この活動をするのは難しく、経営からの面でも月一回での開催という所が多い。これからは市の支援がもっと増えるといいと思う。個人だけではなく、座間市という大きな自治体が支援したら、もっと寂しい思いをしている子ども達の事を笑顔にする事ができるのではないだろうか。私は今回、子ども食堂を調べてみて、地域で子育てをするのは、とても良い事だと思った。そう考える人が一人でも増えれば、もっとみんなが暮らしやすい社会になるのではないだろうか。みんなで力を合わせて、子ども達の笑顔を増やしていきたいと思う。

【小学校１・２年生の部　優秀賞】

ふじゆうな人をたすけよう

ひばりが丘小学校２年　伊藤　拓海

せかいにはからだがふじゆうな人もいればけんこうな人もいます。

そこでみんなのたすけあいがひつようです。

みんなの力があればなおるびょうきがあるかもしれません。

一かいでもたすけられた人は、「自分がたすけてもらった人なんだ、みんなにおんがえししなきゃ。」とおもうみんなのささえあいがひつようだとおもいます。

そうゆうみんなのゆう気、そしてなによりもみんなへのおんがえしの力で人はあんしんします。

【小学校１・２年生の部　優秀賞】

みんながしあわせにくらすために

中原小学校２年　和田　花凛

みんながしあわせにくらすために、わたしは、お年よりの人にでん車の中でせきをゆずってあげてお母さんのひざにすわったけいけんがありました。そのときに、「えらいね」といってくれたので、うれしかったしあたたかい気もちに、なりました。これからも、てつだったりゆずったりしていきたいとおもいました。

【小学校３・４年生の部　優秀賞】

しょうがいしゃのための物

立野台小学校３年　遠入　千尋

わたしはほいく園の時に、しんごうの前に黄色いブロックがあることに気がつき、「なんだろう。」と思いました。ほいく園の先生に聞いてみると、

「それは、目が見えない人のためにあるブロックなんだよ。」

とおしえてくれました。わたしは、目が見えない人は、こうやってみちをはんだんしているんだな、と思いました。

この間家ではじめてせんたくきを回してみました。せんたくきは、ボタンに点点がついていました。わたしは、「なんでだろう。」と思いました。お母さんが、

「それは、目のふじゆうな人がつかうためなんだよ。」

とおしえてくれました。目がみえない人は、ゆびでさわってせんたくきをつかっていることがわかりました。

ほかにも点点のついた本とか、目がみえない人にやくだつ物がたくさんあることをお母さんがおしえてくれました。わたしは、今のよの中は「しょうがいしゃもわたしたちもつかえる物がたくさんあるんだな。」と思いました。

わたしには、しょうがいしゃのために物を作ることはできませんが、たすけられることがあったらたすけて、しょうがいしゃのための物にまけないくらい力になっていきたいと思います。

【小学校３・４年生の部　優秀賞】

みんなを笑顔にする力

立野台小学校４年　越川　琴葉

わたしは、下校中に目の不自由な人を見たことがあります。

その人は、信号が赤なのに横だん歩道をわたろうとしていたので、わたしは声をかけようとしました。すると、通りすがりの人が

「今は、赤信号ですよ、あぶないのでさがりましょう。」

と、声をかけてくれたので、ほっとしました。

わたしは、こう思いました。

「声をかけてくれる人がいなければ、あの人は車にひかれてしまっていただろうな。声をかけてくれる人がいて、よかったな。つぎに目の不自由な人や赤信号をわたろうとしている人がいたら、声をかけてあげよう。」

と思いました。

みなさんも声をかけてあげるときは、やさしく声をかけてあげましょう。

なぜなら、強く言ってしまうと、あいてを、びっくりさせてしまうからです。友達などに、とつぜん強く言われると、あまりにもとつぜんで、びっくりしてしまうのと同じことです。そして、体の不自由な人のことを、ばかにしないであげてください。

その方たちは、不自由な体になりたいからなったわけではないからです。

わたしは、はじめて目の不自由な人を見たとき、つえでどうして地面をたたくのかふしぎに思いました。つえで地

面に何があるのか調べているからだそうです。

　これからは、たくさん声をかけてあげたいと思いました。

　みなさんも、まちで見かけたら声をかけてあげてください。やさしく声をかけると、声をかけられた方も、声をかけた方も、みんなが笑顔になれるから。

【小学校５・６年生の部　優秀賞】

最初の幸せになる声かけ

相模野小学校６年　塩澤　結花

私はよく、電車やバスなど、至るところにはられた、あるはり紙を見ます。

それは、みなさんもよく知っていると思いますが、『体の不自由な人や妊娠している人には、席をゆずりましょう』と書かれているものです。

最初は、その本当の意味があまりよく分かりませんでした。

でも、その意味が分かったのは、４年生のときでした。

私は、左うでを骨折し、とても不便でした。ノートを左腕で押さえることやランドセルを背負えないことなど、これ以外にも不便なことは、まだまだありました。

そんなとき、クラスの子たちが、給食の牛乳パックを開いてくれたり、校門のところまで荷物を持ってくれたり、心配して手伝ってくれて、とても助かったことを覚えています。

もっとさかのぼると、１年生の時に転んで顔をけがした時には、上級生の人達が、お母さんを呼んでくれたり、ハンカチを貸してくれたりしました。

１年生の時はまだ、あまり思いやりというものを知りませんでした。でも、６年生になった今、それがやっと分かったような気がします。

私は、それまで電車で体の不自由な人に席をゆずれない人達に、「ゆずってあげればいいのに。」と思っていたけど、その時に自分も譲れなかったので、人のことは言えな

いと気付きました。

私を含め、他の人達もその時は、「ゆずりたいけど勇気がない。」とか「面倒だ。」などと思っていたのかもしれません。

一人が声をかけて助ければ、席をゆずれるのはもちろん、今問題となっているいじめを止められたりもできると思います。一人の声かけで思いやりが始まるなら、だれかが勇気を出さなきゃいけないということです。

でも、勇気を出すことはまだ難しいなら、身近なことで何かできることを探せばいいと思います。できることを一人一人ががんばれば、思いやりにあふれた社会になると思います。

だから、バスや電車にある優先席のはり紙には、障害がある人、体に赤ちゃんがいるお母さん、お年寄りへの優しい思いやりがいっぱいつまっていると思います。

席をゆずっても、断られても言われた人にとっては、思いやりを感じてうれしいことだと思います。そういう思いやりも含め、人が人を思いやることは、お互いにとって、とても幸せなことだと思うし、大切なことだと思います。

だから、だれかを幸せにできる思いやりのある最初の声かけを自分もがんばってできるようになりたいと思います。

【小学校５・６年生の部　優秀賞】

一人一人の心の中に

立野台小学校６年　鈴木　琴乃

「大丈夫？」

この言葉はほとんどの人が言われたり、自分が相手に言ったりしたことがあると思います。これもさり気ない一言ですが、福祉なのではないでしょうか。

相手を「想いやる」言葉は全て福祉だと思います。

私は「思う」と「想う」のちがいがわからず、調べてみました。そこには「思うとは心や頭で考えること。」「想うとは心でその姿を見て感じること。」と書かれていたり、「思うとは自分で考えること。」「想うとは相手のことを想う気持ちということ。」と書いてあったりしました。これらを見て、私は「想う」という言葉は福祉だと思いました。

この言葉を取り入れた私なりの造語、「想いやり。」ここから福祉が広がっていくと考えています。「思いやり」とはその人の身になって考えて、察っして気遣うこと、という意味です。「想う」と「思いやり」が合わさることで、「心でその姿を見て感じ、相手の身になって考える」という意味をイメージした造語になっています。

偏見で相手のことを決めつけず、きちんとその人の心に心で向き合う。それも想う大切な「想いやり」です。また、最初に言った

「大丈夫？」

というのも同じです。「想いやり」この造語から広がる福祉は無限大です。視覚障害のある方、聴覚障害のある方、

足や手が不自由な方、体のどこか一部の動きが制限されているだけで私達にとっての当たり前が当たり前じゃなくなってしまっている人がいます。その人を想いやって助けるのが福祉です。でも、それだけが福祉ではないと思います。

日常の中で想いやりの行動は全て福祉だと思います。想いやりさえ持てば、一人一人が福祉をしているのです。登下校のときに低学年のことを気遣って歩いたり、けがをしている人に声をかけたり、困っている人の話を聞いてあげたりなど、想いやりの心があれば福祉の心でもあるのです。私はこの造語を思い、日々をすごしていきたいです。そこから福祉を広げていければと思います。

【中学校の部・優秀賞】

勇気をもって

栗原中学校２年　山口　花南

もしも、耳が聞こえなくて困っている人がいたら、みなさんは助けてあげることができますか。具体的にすると、例えば病院で診察室に呼ばれているのに気づいてない人がいたら、みなさんは教えてあげることができますか。もちろん、耳の聞こえない聴覚障害者なので気づかないのは当たりまえです。では、どうしたら助けてあげることができるのでしょうか。普通は、声をかければいいのですが聴覚障害者なのでそれでは伝わりません。なので一番最適なのは手話だと言えます。でも手話をできる人は少ないと思います。では、どうしたらいいのでしょうか。

ある日、学校で福祉体験をすることになり私は手話について教えてもらうことになりました。教えてくださる方は二人いて、私はその方々を迎えにいきました。すると二人は手話で話していました。私は、「迎えに来ました」という手話が分からずその場に立っていると、私の姿に気づいて私の方に来てくれました。そのまま無言でただ目的地へ向かいました。そして目的地に近づいてきた時に、私は、

「もうすこしで着きますよ。」

と話しかけました。その方々は、聞こえるはずもないのに話しかけてしまったのです。そして私は恥ずかしくなりそのまま無視して歩き続けようとしました。すると、その方々は私の手を取って、「わかった」と言ってくれました。音はないのに、聞こえないのに、その言葉が「わかった」と見ただけで聞こえてきました。

私は、この体験を通して学んだことがあります。それは、勇気を持って話しかけることの大切さです。聴覚障害者は、見た目だけでは聴覚障害者とは判断できないそうです。足の悪い人は、車いすに乗っている。目の見えない人は、棒を持っている。このように、見た目だけで判断できないのは聴覚障害者だけなのです。なので、困っているときに気づかれにくいそうです。だから、話しかけてくれると、とてもうれしいと話していました。もちろん、声は聞こえないし言葉もかえせないけれど、口の動きで分かるそうです。

手話は便利だけれども、みんなができるわけではありません。でも、私が話しかけたように手話がなくても、言葉は通じるのです。

もしもこれから、文の最初のように病院で呼ばれているのに、気づいていない人がいたら勇気をもって話しかけてみようと思います。「音がなくても言葉が通じる」ということを忘れずに。

これから先、もしも困っている人を見かけたら、みなさんも勇気をもって話しかけてみてはどうですか。

【中学校の部　優秀賞】

普通と向き合うこと

相模中学校３年　佐藤　恵真

「普通とは何ですか？」素朴な疑問だと思われるかもしれませんが、私は未だに理解することができないのです。

世の中には沢山の「普通」という言葉であふれています。「それが普通」や「普通にしろ」や「もっと普通の考え方をして」など私は何度も「普通」という言葉を言われてきましたが本当に「普通」という意味が理解できないのです。

私は保育園の時に「自閉症スペクトラム」という障がいの一部があると言われました。私の場合は、相手の事を考えずに自分勝手な行動をしたり、決まり事やルールを勝手に変えたりして自分の思い通りにするということがよくありました。今ではそういう事は減りましたが、人の気持ちを理解する事が苦手だったり、人との距離感をつかむことが苦手であったり、一般的に言われている「空気の読めない行動」をとってしまう事で、悪気がある訳でも無いし、自分なりに努力をしているつもりなのに、周りからは誤解を受け孤立してしまいます。

インターネットの世界では、少しでも変な行動をすると、すぐに障がいの名前を出して批判をする人が沢山います。それを見ると、とても悲しくなります。人を非難する言葉として障がいの名前を軽はずみに使われていたり、悪いイメージとして使われている事が、とても不愉快です。どうしたらこの現状を打壊する事ができるのでしょうか。

そのためには、自分の持っている特性を理解してもらうために、勇気を持って話す事、いわゆる「対話」がとても

重要だと思います。

ニュースでよく見る人種差別や、宗教の違い、貧富の差なども、周りに理解されていない、対話が足りないという点では私の現状と同じかもしれません。もっとお互いへの理解が進めば、暮らしやすく、より良い世の中ができるのではないかと思います。

そのためには、自分の中の「普通」を一回見直して、人の立場に立ち、考える事が必要なのではないかと思います。

まだまだ私も「普通」というものが何なのかは分からないですが、いつか自分も理解が進んで「普通」ということに縛られない様になれたら良いと思います。そうすればきっと様々な人にとって心地良い世界になるのではないかと思います。

【小学校１・２年生の部　佳作】

おじいさんやさしいね

ひばりが丘小学校２年　江川　紗彩

きのうわたしは、ならいごとのかえりに、よくあう、４かいのおじいさんにあいました。でもそのおじいさんは、つえをこつこつとおとをたてて、あるいています。おじいさんは、おみせでかったしなものをおとしてしまいました。でもおじいさんはつえをもっているのでなかなかひろうことができません。でもおかあさんがひろってあげていてわたしもひろったらありがとうといって、いいえこちらこそいつもやさしくしていただいてありがとうございます。といったら、いえいえとんでもない、こちらこそありがとうございます。っていわれたら、心のなかで、またこういうことがあったらまたやろうとおもいました。

【小学校１・２年生の部　佳作】

ささえあう

立野台小学校２年　柳澤　優里

わたしは、どうとくのじかんに目のふじゆうな人を学校でみてみました。

目のふじゆうな人は、もうどうけんと、くらしています。もうどう犬は、ハーネスという、ものをつけています。それが、とてもやくにたつのです。

ハーネスとは、目のふじゆうな人が、てでもってどこにいくか、教えてくれるのです。

わたしも、もうどう犬みたいにやくに、たちたいです。でも、そのなかでいちばんうれしいのは、「ありがとう。」といわれることです。

そんな、目のふじゆうな人に、であったら、「大じょうぶですか。」や「手つだいましょうか？」などのこえかけをしてみたいです。

【小学校３・４年生の部　佳作】

わたしのおばあちゃん

東原小学校３年　河村　結音

わたしが家にいた時、とつぜん電話がかかってきて、
「おばあちゃんがたおれた。」
といわれてびっくりしました。

数か月がたち、おばあちゃんの家にいったら、手すりがかいだんや手あらいばのちかくにつけられていました。

おばあちゃんの足にウイルスが入ってしまって一人じゃ歩きにくくなって、かいだんをのぼるのもつらそうでした。のぼる時は手をついてゆっくりのぼり時間がかかってとっても大へんそうでした。わたしはそんなおばあちゃんのことを見て、何か自分がたすけてあげられることはないかな、と思いました。わたしはおばあちゃんが少しでも楽にすごせるようにしたいなと思っています。

おばあちゃんは、むかしはとっても元気で速く走っていました。だけど今はかいだんをのぼったり道を歩いたりするのもやっとです。道ろには手すりがついてないところも多いから、わたしはおばあちゃん一人で出かける時はとてもしんぱいです。いっしょに出かける時はわたしが手をつないだりささえたりしようと思います。でも一人で出かけなくちゃいけないこともあるから町の中にエレベーターや手すりがもっとふえてべんりになるといいなあと思います。そして自分のおじいちゃんおばあちゃんじゃなくても、やさしく声をかける人がもっともっとふえてほしいです。

おばあちゃんは、歩くのはおそくなったけれどまだまだ元気です。わたしが大人になっても元気でなが生きしてほ

しいです。

　そして、おとしよりもわかい人もみんながえがおですごせるようにわたしもできることをがんばっていきたいです。こまっている人がいたら少しゆう気をだして声をかけて、どんな手だすけがひつようか聞いてみようと思います。声をかけたりたすけたりすることがえがおでしぜんにできるようにがんばります。

【小学校３・４年生の部　佳作】

車いすの大へんさ

入谷小学校３年　前川　璃緒

わたしは、車いすをつかうのが、大へんなことを知りました。

車いすは、たった五センチメートルのだんさでものぼれません。のぼるためには車いすの前を、手の力で持ち上げてすすまなければ、のぼることができないし、持ちあげすぎると、後ろにたおれてしまいます。だから大へんだと思います。また、手の力がないとのぼれないことに気づきました。とくにお年よりの人は、手の力が弱くなってきているから、だれかに手つだってもらわないと、大へんなことが多いことが分かりました。

車いすにのって外に出た時に、「かわいそう。」と思われるといやな思いをする。」と、テレビのしゅざいをうけていた、おか田さんが言っていました。車いすにのっている人たちは、「ふだんの生活だから、「かわいそう。」とは思わないで、気にしないでほしい。」とも、言っていました。だから、わたしは「かわいそう。」とは思わないで、「何か、手つだえることはないかな。」と、思うようにしたいです。

車いすは少しななめの道があるだけで道に、出ちゃうから、車いすにのるのは大へんだし、歩くほうがはやいから、車いすの人はがんばっていることをはじめて知りました。

このように、車いすにのっている人は、いろいろなことに気をつけて、のっていることが分かりました。だから、こまっている人に、ゆう気を出して、声をかけられるよう

にしたいです。理ゆうは、もし、自分が車いすにのった時に、声をかけてもらうと、うれしいと思うからです。そして、ふくしの「ふだんの・くらしを・しあわせに」をまもれるようにしたいです。

【小学校３・４年生の部　佳作】

困っている人へのいたわりの心

相武台東小学校４年　竹田　亜優

みなさんは、高れい者や障がいのある人は、どんなことに困っていると思いますか。わたしは、ほじょ犬の映像を見て、感じたことを発表します。まず、足がふ自由な人や、高れい者は、道などがでこぼこしていたり、なにか落ちていると、転んでしまうと思います。目に障がいがある人は、地面をつつくぼうなどがあっても、人や物などに当たったりしてけがをしたり、めいわくをかけるかもしれません。そんな障がい者を助けるために活やくするのが、ほじょ犬です。ほじょ犬には、目が見えない人を助けるもうどう犬、耳がきこえない人を助ける聴どう犬、手や足のふ自由な人を助ける介助犬など、三つのしゅるいに分けられます。みなさんは、ほじょ犬としてかわれている犬は、障がい者のために働くのがストレスになって、早死にしてしまうのではないかと思ったことはありませんか。でも、ほじょ犬としてかわれている犬は、ふつうにペットとしてかわれている犬と平きんてきにじゅみょうはかわらないそうです。むしろふつうにかわれている犬より長生きする犬も少なくないそうです。そのことを聞いて、わたしはびっくりしました。犬は、自分がやるべきことを生きがいとする動物なので、ほじょ犬となった犬はきっと障がい者であるかいぬしさんのために活やくすることを生きがいと思っているのではないかと私は思います。わたしがおどろいたのは、ほじょ犬の数の少なさです。ほじょ犬をひつようとしている人は１万人以上いて、ほじょ犬をひつようとしている人を入

れて目が見えない人、手足が不自由な人、耳がきこえない障害者はどれも３５万人以上いるのにもうどう犬は９４頭、聴どう犬は４５頭、介助犬は１９頭と全然たりていません。きっとわたしは、ボランティアなどで集めたお金がたりなかったり、くんれんがむずかしいため数が少ないのではないかと思っています。ほじょ犬をくんれんさせるためのお金のぼ金があったら、ぜひさんかして見てください。もし、障がいのある人を見かけて困っていたら、「ここになにがある」と言うのを教えてあげたり、点字ブロックなどの上になにかおいてあったら、どけてあげたりしたいと思いました。耳の聞こえない人には、もし手話はできなくても手話ににたような動さで物事を教えられるかもしれないと思いました。手足の不自由な人には、いっしょに横だん歩道をわたることができると思います。そんな何げないことでも助けることができるのではないでしょうか。わたしは福しの映像を見て、友だちや家族、そして障がいのある人に、やさしい気持ち、いたわりの心を持つべきだと思いました。

【小学校３・４年生の部　佳作】

気持ちを考えることは大切

東原小学校４年　宮松　芽唯

私のようち園の時にあった話ですが
「転校生がやってきました。」
と先生が言ったので、わたしはふと思いました。
「たくさん話して、仲よくなろう。」
そして次の日、
「おはよう。」
と言いました。けれど返事をしてくれません。たまたま聞こえなかったのかなと思い、もう一度話してみました。けれど、また返事をしてくれません。なので先生に聞いてみました。
「なぜ、返事をしないんですか。」
すると先生が
「耳が不自由なんですよ。」
この言葉を聞いて
「どうしたら話せるのだろう。」
そう思いお母さんに聞いてみました。
「耳の不自由な子と、どうしたら話せるの。」
そしたら、
「話すことは出来ないけど気持ちを伝えることは出来るよ。」
私は気持ちを伝えると聞いて、思いつきました。
「そうだ。紙に言葉を書けばいいんだ。」
　次の日から、たくさんの紙を持っていくことにしました。
明日のために

「おはよう。」
と書いた紙も持っていくことにしました。明日になり、さっそく
「おはよう。」
と書いた紙をわたしました。すると、
「おはよう。」
と返事をしてくれたのです。その子にはじめて気持ちを伝えることが出来て気がつきました。「気持ちを伝えることは大切なことなんだ。」お母さんの一言や、このけいけんでたくさんのことを学びました。

【小学校５・６年生の部　佳作】

バスの中で

座間小学校５年　村田　葵

私は昨年の夏アメリカのオレゴンに行きました。そこで私はバスに乗りました。そのバスには、優先席がなかったので、理由が気になって、お母さんに聞いてみました。そうするとお母さんは、

「オレゴンは優先席がなくてもみんな席をゆずってくれるから、にんぷさんや、体の不自由な人やお年よりは困らないの。他にもオレゴンのバスは、日本のバスとちがって車いすの人が乗れるスペースが二つあるの。」

と言いました。私は、とてもすごいなと思いました。理由は、私は席をゆずろうかなと思った事はたくさんあったけれど、じっさいにゆずろうとすると、きんちょうして出来なかった事が多かったからです。だから、ふつうに席をたくさんゆずる事ができるオレゴンの人たちは、とてもすごいし勇気があると思いました。

私は日本に帰った後、たくさんの人に、席をゆずりました。初めて席をゆずった時は、ことわられてしまいました。でもがっかりはしませんでした。それにゆずってしまえばけっこうかんたんな事でした。そしてたくさん席をゆずっているうちにお礼を言ってくれてことわらない人も多かったので、とてもうれしかったです。

私は、いつか日本もたくさん席をゆずってくれる人がふえて、優先席がなくても大じょうぶな所になってほしいです。もしも席をゆずるきかいがあったら、勇気をもってやってみて下さい。

【小学校５・６年生の部　佳作】

ねぎ落としましたよ

栗原小学校６年　山﨑　香菜絵

私は、学校の下校のとちゅうで見た事についてお話しします。

ある日、学校の下校の時私は、１人で帰っていました。家の近くの坂を上っていくと、一人の男性が坂を下っていました。その男性は、サングラスをかけて、つえを左右にふりながら歩いていました。私は、多分この人は目が見えない人だと思いました。初めて目が見えない人を見て、私は、坂を上りながら、じっとかわいそうだな、大じょうぶかなと思いながら見ていました。

その時、その男性が持っていたスーパーマーケットのふくろから出ていたねぎがつえにぶつかって落ちてしまいました。私は、勇気を持ってその男性に声をかけました。

「ねぎ落としましたよ。」

そしたら男性は、私がしゃべっている方の、反対の方を向いて、

「ありがとう。目が見えないから歩くのも、大変なんだよ。ありがとね。」

と、やさしく言ってくれました。その人は、反対を向いてしゃべっていたけど、目が悪いのでしょうがないと思いました。それなのにすごく気持ちが伝わってすごくほこらしい気持ちになりました。自分でも良い事をしたなと思いました。

まだまだこうゆう人はたくさんいます。目の見えない人や、高齢者、障がい者、生活に困っている方など、もっと

もっといます。

私は、こうゆう人たちを助けてみたいと、あの時強く思いました。それができなくてもその人たちに安心してもらえるようにしていきたいです。それが福祉だと思いました。

また、そう思ってくれる人も増えてほしいです。助けてあげた人も助けられた人たちもあるいは、それを見た人たちも、温かい気持ちになれるようにしたいです。

【小学校５・６年生の部　佳作】

ぼくに出来ること

相模が丘小学校　６年　松田　朋樹

「ぼくにお手伝いできることありますか。」
塾に向かう途中のエレベーターで車いすに乗った男の人にぼくが声をかけた時のことです。二人でエレベーターが来るのを待っていました。ぼくは、エレベーターが着いたら先に乗ってボタンを押しながら手でドアをおさえて、
「どうぞ」
と声をかけました。ところが、車いすの前輪がエレベーターのみぞにはまってしまいました。以前同じようなことがあった時あまり役に立てなかったのでどうすれば良かったのかネットで調べていたことがありました。その学びを思い出して
「車いすを押しましょうか。どんなことに注意したら良いですか。」
と声をかけ、細かく確認をしながら手伝いました。
「一階で良いですか。」
とボタンを押す時も積極的に声をかけ、降りる時もまたタイヤがみぞに引っかからないように
「前輪を上げますね、前に進みますね。」
と声をかけながらゆっくり動かしました。
「他にお手伝いできることありますか。」
と聞いたら
「ご親切にありがとう。助かりました。」
とにっこりしてくださり、別れました。

今までテレビや新聞から福祉とは車いすを押してあげるなどの手伝いをすることだと思っていたけど、実際に経験して、更に深く調べて安心して幸せに生きることだと知りました。一人一人、その時の状況でも事情が異なると思うので、ただ手伝うのではなく、相手の状況や気持ちを考えてその時に合った声かけをし、しっかり理解して行動することが本当の親切だと思います。体の不自由な方たちのことについて、もっとぼくが色々知ること、実際に関わることでの気づきや学びも大切で必要なことだと感じました。これからもこの経験から学んだことを生かして、困っている人を見かけたら、どうしてあげたらいいのか、どう声をかけてあげればいいのかを判断して、積極的に役に立てるように、行動していきたいと思います。また、ボランティア活動にも参加してぼくにできることについて、学びを深めていきたいと思います。

【小学校５・６年生の部　佳作】

不自由な人達のためにも

中原小学校６年　大矢　珠璃

今、私達には何ができるだろうか。考えればつぎつぎとでてくる。でも私にもできないことがある。だからこそ、みんなの力もかりていくことを改めて大事に思える。不自由な人達のためにも努力をして安心してもらいたいと思う。そんな中で特に気になったのは耳の不自由な人だ。

耳の不自由な人達とは中学年のころ出会った。私達の前にでてきた人達の一人が、

「この中でだれが耳の不自由な人でしょう。」

と言った。私は耳の不自由な人だと思う人にまっすぐに手を挙げた。みんなもそれぞれに手を挙げていた。そして前にでてきていた一人が、

「正解はこの人です。」

と大きな声でいった。不自由な人、それはだれも手が挙がってなかった人、何人か手を挙げていた人、ちょっとだけ手が挙がっていた人達だった。みんなはだれも手を挙げなかった人にびっくりしていた。でも私は、その人がまったく不自由な人に見えなかったので、不自由な人でも笑顔でせっしていればかわらないんだなと学べることができた。他の耳が不自由な人達も何も聞こえなくてもにっこりしていた。こんなにもうれしい笑顔が見られるとこっちもなんだかうれしくなってしまう。耳が不自由でも気にせず、みんなが何を言っているのかをまるで聞こえているように反のうしている。なんだか耳の不自由な人達はすごいな思った。不自由な人とは思えないすがただったから、かっこい

いと感じた。
　手話はとてもむずかしかった。耳の不自由な人達のまえにパソコンで自分の名前を練習していたのだ。私の名前は小さい「ゆ」があるのでとてもむずかしかった。みんな、
「どうやるの？わかんない。」
というので近くの人達がやさしくわかりやすく教えていたので、その人もだんだんできるようになっていった。そして代表者が、耳の不自由な人と手話で名前を伝えた。みんなとてもうまく、耳の不自由な人もびっくりしていた。耳の不自由な人も名前を伝え、代表者の人と仲良くなっていた。それをみるとうれしくてたまらない。代表者の周りにいた耳の不自由な人、先生も笑顔があふれている。とても明るいふんいきだった。私は耳の不自由な人と名前を伝えられなかったけれど、来てくれたのでそれだけで、満足した。ただしゃべるだけでも楽しいけれど、手話は、手だけで表すのでむずかしいことを改めて感じたけど、なんだか手で自分の気持ちを表して、それが相手に通じるとうれしいので、手話も楽しいなと思えるようになった。この体験で手話のおもしろさを感じることができた。
　他にもふつうの授業で何も聞こえないヘッドホンをつけて授業を受ける体験をした。つけられた人は、おどおどしていた。どうすればいいのかを考えていたのだろう。自分の番がきて、ヘッドホンをつけられた。何も聞こえないただその一言だけだった。みんな何をしゃべっているのかもわからないし、一人だけ仲間はずれされたような気分だった。ヘッドホンをはずされると聞こえるようになった。耳の不自由な人は、手話がないと、何も聞こえず、仲間はずれにされていると感じているのかもしれない。そうなると、

とてもかわいそうだ。だから、みんなが支えていくんだ。今、大人になっている耳の不自由な人達も色々のりこえてきたんだろう。そう思うと、努力の大切さが伝わってくる。勉強もがんばって聞こえなくても覚えようとしていたんだと思う。

耳の不自由な人は、勉強もがんばって、手話で自分の気持ちを伝えて、そのたいへんさが伝わった。

これからも耳が不自由な人達を笑顔にできるようにしたい。また、私達には何ができるかをもう一度、考えていきたい。

【中学校の部　佳作】

ちょっとした気づかい

東中学校１年　山﨑　結芽

私はバスでの出来事についてお話しします。

私がバスに乗って、何個かバス停を過ぎると次のバス停に一人の車イスの方が待っていました。バスはそのバス停に停まりました。私はどうやってバスに乗るのかな？と思っていると、運転手さんが出口のドアの方まで行き、ドア付近にあった、おりたたみ式のスロープみたいな物を取り出して地面とつなぎゆっくりおしながらバスに乗せてあげてタイヤが動かないようにするためのストッパーらしい物をタイヤにはめてシートベルトをしてあげました。ここまでにかかった時間は約十分位でした。

私は急いでたりしなかったけど、周りの人は、分かりません。スーツを着ている方もいました。でも誰一人として文句を言わずに、温かい目で見守っていました。そして、車イスの方も「お待たせしてしまってすいません。」とバスにいる人に謝っていました。

私はそんな車イスの人とバスにいる人を見て、優しい人ばかりで車イスの人も安心しているのかなと思いました。朝だったので急いでいる人がいたかもしれないけど、文句を言わない事は、すごいと思ったし、それだけ一人一人が、優しい心を持っているという事だからです。そして私が優しくていいなと思ったことは、もう一つありました。それは、バスの人の車内放送の言葉です。一つは、「お待たせしました」でもう一つは「右曲がります」や「止まります」などの方向をしめす呼びかけです。その車イスの人が

乗ってくる前も放送していましたが、その車イスの人が乗ってきた後の方が多く放送していました。それが仕事としての言葉だったとしても、何か不自由がある人に対しての安心できる言葉はすごくその人にとって優しい気づかいだなと思いました。

私は車イスの人とかだけではなくて体に不自由がある人が暮らしやすいためには、少しの気づかいや、バスの運転手さんみたいな声かけが必要だと思います。それは、もし自分がそうなった時に、周りの人の助けが絶対に必要だと思うからです。だから私も、体が不自由な人はもちろん、困っている人がいたら声をかけたり手を差しのべたいと思いました。そうすれば、体が不自由な人だけでは無くて私達も、助けてあげた人も幸せに、暮らしやすい世界になると思うからです。そして、優しい心を持った人が増えるといいなと思いました。

【中学校の部　佳作】

みんなが暮らしやすい社会のために

栗原中学校２年　勝又　心結

私は、「福祉」というものが、障害のある人だけに対するものだと思っていました。けれど、本当は、「全て」の人に対するものだと、一年生の時の福祉学習で、よく学ぶことができました。

今、私の体に不自由なことはありません。でも、生活する上で不便だと感じていることを、いくつかあげてみたいと思います。

まず、ホームドアのない駅。これは、混雑する時間帯に他人とぶつかると、線路との間にある程度の距離があっても、一瞬ヒヤリとしてしまいます。これがもし、目の見えない人で、誰も助けてくれなかったらどうでしょうか。実際に、ホームドアのない駅で、目の不自由な人が線路に転落し、電車にひかれて死亡した、という悲しい事故が起きています。例えば、A駅の利用者数は、B駅の利用者数よりも少ないから、ホームドアはなくても平気、ではなく、設置できるほどの収入のある駅は、その駅の力でつけて、無理なところは、国が補助して、ホームドアの設置を義務づけると、これからの事故を減らすことができると思います。

二つ目は、音のでない信号。私も、友達と話しながら信号が赤だということに気付かず歩こうとして、あわてて友達に止められた、という経験があります。もしその時、止められていなかったら、私は今、ここにいなかったかもしれません。目が見える人は、色で判断することができます。でも、目が見えないと、誰かが言ってくれないと、渡るこ

とができません。でも、「音」という合図があれば、一人でも、より安全に渡ることができます。

体の不自由な部分がない人は、特に気にすることもなく、「障害者」と呼ばれる人たちの前を通り過ぎることが多いと思います。でも町の中をよく見てみると、色々なところで困っている人がいます。そんな人たちにそっと手を差し出せるような人が増えて、誰もが暮らしやすい社会になるためにはどうすべきか、私はこれからも考え続けていきたいです。

【中学校の部　佳作】

たくさんの人が幸せでいられるように

南中学校２年　中村　結菜

私は、「お年寄りに優しくする」ということや「体の不自由な人に優しくする」ということはどういうことなのか、どういう行動をしたら良いのか分からなかった。けれど福祉体験や自分のまわりの身に起こったことをきっかけによく考えるようになったし、少しずつ分かってきた気がする。

昨年の三月、私の祖父が検査入院をした。私は、身内が入院するというのが初めてで、どういう風に行動したら祖父が楽にすごせるのかというのが分からなくて色々と迷惑をかけてしまったけれど、親に聞いたりして分かったことがある。それはまわりを見て行動することや相手の立場になって考えることが大切だということだ。私は昔から色々なことに不器用でまわりを見て行動するのが苦手だったけれど少し意識して行動するだけでも変われる気がする。実際、以前よりもあたふたしないで行動できるようになったし、気持ち的にも余裕を持って動けるようになった。

また、「まわりを見て行動する」というのや「相手の立場になって考える」ということは病院とかだけでなく「公共の場」でも大切になってくると思う。例えば、電車の中でお年寄りの方や体の不自由な方に席をゆずるというだけでも十分素晴らしい行動だと私は思う。実際、自分が電車の席に座っているとき、ふと顔をあげたらつらそうな顔をしている人が立っていた。私はどうしたのだろうと思い、その人の様子を見ていたらヘルプマークをつけていることが分かり、その瞬間席をゆずることが出来た。でもこのよ

うな不自由な人がつけるマークを知らないという人はたくさんいると思う。だから少しでもこういうマークが広まってほしいと本当に思っている。

そして数年前に手話を習っていたことがあり、そこでも学べたことがある。

まず一番最初に自分の名前を手話で言えるようになろうという基本的なことから始めた。そんな基本的なことだけでも覚えてスムーズに表現するのが難しく本当に苦労したから、改めて手話を使って日常を送っている方はすごいのだなと苦労しているのだなということが分かった。

それから数回にわたって先生から手話をおそわっていく中で、

「あなたは手話をしていく上でものすごく重要なことを忘れている。」

と言われた。正直、自分なりに頑張っていたので何がダメなのか分からず、聞き返してみたら、

「笑顔を忘れているのよ。笑顔で手話をしないと相手に何も伝わらない。相手はあなたと違って音が聞こえないのだから。その人のことをよく考えてあげて。」

と言われた。確かに私は手話を正しくやることにとらわれすぎていて表情がすごく硬くなってしまっていたかもしれない。ここで私は相手の立場になって考えてみた。やはり相手は音が聞こえないのだから、表情で自分の気持ちを表さないといけないのだということにようやく気が付けた。

そして、最終日には老人ホームへ行き、手話を披露したり、お年寄りの方々と遊んだりした。そのときに私は「常に笑顔で相手の気持ちを考えながら行動する」というのを目標にしていた。だから、すごく楽しくすごすことが出来

た。

　最後、お年寄りの方々とお別れのとき、ある一人のおばあちゃんに、

「あなたの笑顔すごくよかったよ。」

と笑顔で言われました。私はその時、笑顔でいるだけでたくさんの方が幸せでいられるのかと思えました。

　これらを機にお年寄りの方や体の不自由な方はもちろん、何か困っている方に対しても笑顔で優しく接することが出来るようになったと感じる。これからたくさんの人が笑顔でいられるように、まずは自分が笑顔で優しく様々な人と接していこうと思った。

【中学校の部　佳作】

ささいな事で

南中学校２年　安松　翼

突然ですがみなさん、今この町座間市や、座間市周辺は高齢者の方々や障害を持っている方々、小さい子どもたちにとって安心し何より安全に、そして暮らしやすい町と言えると思いますか？今、座間市は『地域を見守り・見守られる環境作り』や『誰もが担い手になれる座間市』などといった福祉活動をしています。例えば朝、登校時に登校班を見守っていたりしていたり、皆の見えないところで福祉活動に力を入れていると思います。そして、ここ座間市だけでなくもちろん、他の地域も座間市同様福祉活動に力を入れていると思いますが、特に座間市は良く高齢者の方々に優しいと僕は思います。なぜなら頻繁に高齢者の方々に声をかけている人を見かけるからです。ささいな事でさえも「大丈夫ですか？」や「お手伝いしましょうか？」といったような声かけをしているのを見かけます。

以前、自分にもそういった機会がありました。ですがその時は自ら声をかけることができませんでした。ですが、二つの大きな出来事をきっかけに自ら声をかけられるようになりました。

まず一つ目は東日本大震災の影響があります。以前テレビで東日本大震災の特集がやっていて、当時震災にあわれた人々は「とっても怖かった。けれども近所の子どもたちの笑顔や近くの人たちの『大丈夫ですよ、一緒にがんばりましょう。』といったとてもささいな一言。でもそのささいな一言に大きな勇気をもらったのです。」という言葉が

僕の胸に深く突き刺さりました。当時の僕はまだ幼かったのですがその言葉を聞き「自分も困っている人を見かけたら声をかけてみようかな…」といった気持ちが芽生え始めました。恐らく東日本大震災というとてつもなく大きな自然災害を目の当たりにしたことのショックがかなり大きかったのでしょう。それから僕は自分の身の周りに落ちてくる物がないか、などと周りに目を配り始めました。

　そして二つ目は現在住んでいるこの町、座間で実際に起きた事なのです。僕はその日、母と駅を歩いていました。ふとした瞬間、コン！コン！という靴の音と共にカツ！カツ！という別の音が聞こえてきました。そちらの方に目を向けてみると、目は開いていなく、白いまつば杖を片手にフラフラとおぼつかない足つきでこちらに向かってくる一人のお年寄りの方がいました。その時僕は「なんで？近所の人にはあいさつもできるし、友達や親にだってありがとうやごめんなさいは素直に言えるし、電車に乗っている時だってバスに乗っている時だって席はゆずれる。でもどうして今は声がかけられなくて足がすくんじゃうの？」と思いました。その時の事を今思い返してみれば当時の自分の中にやはり恥ずかしい、目立ってしまうといった羞恥心がわずかですがあったのです。すると近くにいた女性の方が歩み寄っていき「大丈夫ですか？何かお手伝いしましょうか？」と一言声をかけ、お年寄りの方は無事、電車に乗っていきました。その途中、そのお年寄りの方はペコペコ頭を下げ、何度もお礼を言っているように見えました。試しに自分も目をつむり、駅を歩いてみると母の手を握っているのにもかかわらず、何がどこにあっていつ人にぶつかるかわからないという恐怖と不安から足が動きませんでした。

これは一言声をかけてもらえるだけでとても楽になる、と強く実感しました。それから僕は周りに困っている人がいないかということに敏感になりました。

　このようなことから僕はささいなことでも声をかけ、困っている人の光となりたいと考えるようになりました。そして今、日本では少子高齢化が大きな問題となっています。さらに僕たちが大人になった時、今のお父さん、お母さんは『高齢者』と呼ばれるようになるのです。そうなった時に僕たちに出来る事ことは何でしょうか？どうせ僕なんて、どうせ私なんかじゃ、なんて思ってる人が大半だと思います。僕も前まではそうでした。ですが僕は変われました。なので皆さんも変われるはずです。これを読んでいるそこのあなた。他人事にしないでください。まずは自分から行動することを考えてください。その一つ一つのささいなことの積み重ねが、この世の中を変える大きな一歩になるのではないでしょうか？

【標語の部　最優秀賞】

ここどうぞ　自分で作る　優先席

東中学校１年　小山　陽香

【標語の部　優秀賞】

勇気はね　心のだんさを　うめる物

相模が丘小学校５年　加藤　愛結

思いやり　差し出すその手が　未来の輪

新田宿在住　岩堀　多起子

【標語の部　佳作】

手を出そう　その手で未来が　変わるから

ひばりが丘小学校６年　松岡　大和

元気はね　もらってあげての　くり返し

東中学校１年　太田　爽日

温かい　その一言が　ほほ笑みに

東中学校１年　齊藤　風音

人と人　支える社会　笑顔あり

入谷在住　佐藤　玲子